

博物館

Museum News
No.71

ニュース



ムササビ

本種は本州，四国および九州に広く分布し，^{すあな}巣穴となる^{じゅどう}樹洞のある樹木さえあれば，人里近くにも生息します。当館のある文化の森総合公園内にも住んでいます。よく発達した前歯（門歯）と尾を見ればわかるように，リスの仲間（ネズミ目リス科）です。この歯で硬いツバキの実やドングリを食べることができます。また，よく知られているように，首から尾の付け根にかけてある皮膜を広げて^{かいくつ}滑空することができます。時には180 mも飛ぶことがあるといわれています。その際，長い尾は姿勢を安定させるのに役立ちます。手足には鋭い爪^{つめ}があり，樹の幹^{みき}に引っかけて体を固定することができます。写真には写っていませんが，指の数は前足に4本，後ろ足に5本あります。しかし，骨格を見ると前足にもきちんと5本分の指の骨があることがわかります。このように，骨格から外見ではわからなかった特徴がよくわかります。

企画展「動物大集合」では，当館が収蔵するさまざまな動物標本を展示します。^{ほじゅうるい}哺乳類や鳥類については，剥製標本だけでなく，骨格標本もいっしょに展示しますので，ぜひ見比べてみてください。
(動物担当：佐藤陽一)

城の記憶 — 須木一胤と「旧徳島城図」 —

大橋 俊雄

徳島城は、阿波の大名蜂須賀家の居城です。明治時代に建物などが取り壊され、いまは石垣と堀が残っています。公園として整備され、国の史跡にも指定されています。

「旧徳島城図」1幅(図1)は、御殿や櫓が建ちならぶ往時のさまを描いた復元図です。内容が比較的正確といわれ、城の様子を視覚的にとらえた好資料とされています。

この図には、1967(昭和42)年に蜂須賀家が箱書をしています。1923(大正12)年に、旧藩士が同家の襲爵を祝って献納した品で、須木一胤の作と記されています。製作のいきさつを、近年知られるようになった資料から追ってみます。

作者の須木一胤(1873~1936)は、現在の徳島県徳島市出身の日本画家です。地元で盛んだった住吉派の画法を、佐香美古から学びました。また、徳島師範学校の教諭をつとめ、古書画の展示会や研究会をひらいたり、阿波の画壇の変遷を調べたりしました。

近年、一胤の遺品が、子孫の須木成芳氏から当

館に寄贈されました。そのなかに「旧徳島城図」を撮影した白黒写真が3点あります(図2・3・4)。写されている3点の図は、構図が似ているものすべて別の品です。

図1の「旧徳島城図」は、3点のどれにも当てはまりません。しかし寄贈者は、これも一胤の遺品だった事実を、はっきりと憶えておられました。徳島城の復元図は、少なくとも4点あったことになります。

図4には、一胤自筆の解説文が写っています。彼は、献納図の下絵から写真中の図を描き、1932(昭和7)年の阿波国郷土研究会に出品したと記しています。あわせて、献納のいきさつにも触れています。

概略は以下のとおりです。1918(大正7)年に、蜂須賀正韶が父の跡を継いだとき、旧藩士たちが祝意を表わすため、徳島城の旧状を髣髴とさせる鳥瞰図を作って献納しようとした。里見恵堂と朝川近修が世話をし、一胤に画の依頼がきました。しかし製作は遅々として進まず、献納の手續



図1 旧徳島城図 須木一胤筆 (当館蔵)

きのみが先行しました。

復元は、まず当時の城跡を実写し、残されていた平面図から建造物の位置をさだめ、さらに部分的な写真や見取図から総合して、細部を描きました。その間にも、疑問が続出して作業ははかどりませんでした。里見・朝川両氏の熱心な調査や、古老の親切な助言によってようやく完成に至りました。

一胤は次のように訴えています。「このような復元はすぐにはできず、資料の新発見などをまっけて、少しずつ完全に近づけるしかありません。どうか今後も、皆さんの援助と補正をおしませ願います。これは私一人のためにではありません。」

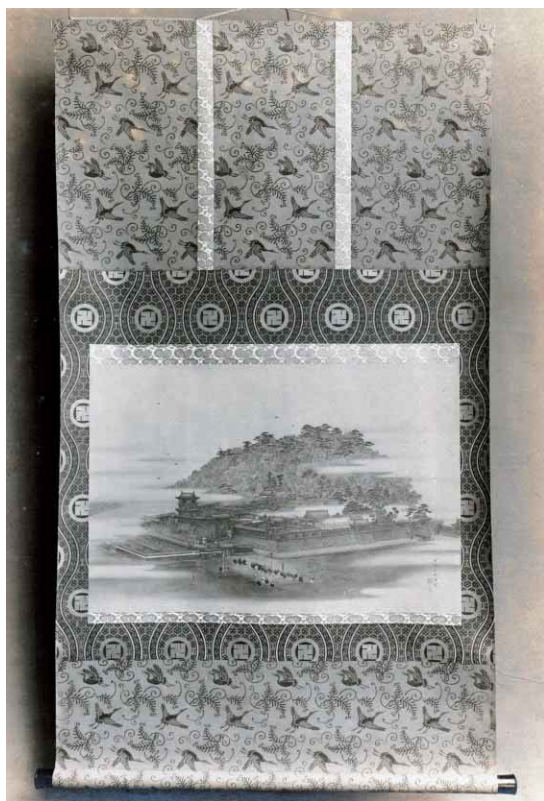


図2-1 旧徳島城図写真（当館蔵）



図2-2 同上 部分

ところで、献納された「旧徳島城図」はどのような図だったのでしょか。

図2は、写真でみるかぎり、図1よりも謹直に描かれた濃彩画と思われ、画中に作者のサインと印章があります。また、蜂須賀家の家紋である左卍紋をあしらった、見事な表装がほどこされています。この図こそ、献納された「旧徳島城図」ではないでしょうか。

図3は、図2にくらべると彩色が淡く、描写の密度も薄らいでいるようです。また、建物の名称を書きこむなど、城をよく知らない人にも配慮がされています。献納図にあわせて作られた別本かと思われるが、どのような事情で描かれたのか定かではありません。

図1は、これまで完成画と考えられていました。しかし先述した通り、一胤が持っていた下絵とみなされます。画面にのこる修理の痕から、ながらく折りたたんで保管されていたことが推測されるからです。子孫の手を離れたあと、いまの表装と箱ができ、箱書が依頼されたようです。

（美術工芸担当）



図3 旧徳島城図写真（当館蔵）



図4 旧徳島城図・解説文写真（当館蔵）

本の紹介

山本候充編 『日本銘菓事典』

あと1カ月もすれば、梅雨も明け、夏休みとなります。休みを利用した旅行の計画を立て始めている方もいるのではないのでしょうか？

さて、旅行につきものといったらおみやげで、このおみやげとしてしばしば求められるものに、その土地の銘菓と呼ばれるものがあると思います。昨年には、銘菓の中でも有名なものに、製造日の偽装等が見つかったりして、残念なこともありましたが、銘菓には、その土地の特色にちなんだユニークなものが多く見られます。訪れた土地のイメージを、その土地の銘菓で再確認したり、ほかの人に伝えたりする楽しさがあるかと思えます。

紹介する『日本銘菓事典』は、その名の通り日本各地の銘菓を、都道府県ごとにまとめて紹介した事典です。菓子名、菓子の材料・形、販売している店舗のほか、その菓子の出来上がった由来が記されています。お菓子を通して、その土地柄が感じられる「お菓子の風土記」的事典を目指したということです。順に目を通して行くと、さまざまな銘菓の存在を知ることができるのはもちろん、菓子の背景となった各地の風景や名所、特産物、歴史のミニ知識を得ることができます。また、販売品ではない土地に伝わる郷土菓子や、菓子に関する博物館や図書施設の紹介もあり、よその土地を知るちょっとこれまでにないガイドブックのような感じを受けます。

記載されている事例の中で、面白いと感じたものをあげてみます。

北海道旭川市の銘菓「-41℃（氷点下41℃）」はスライスアーモンドが北の大地、ホワイトチョコレートが白雪、最中がダイヤモンドダストを表現した菓子です。日本の気象史上、最低気温を旭川で記録したため、その温度を菓子名にしたそうです。

富山県の「反魂旦」は、江戸時代に富山の薬売りが全国に広めた、万病にきく丸薬「反魂丹」を摸した一口饅頭です。丸薬に見立てて金色の紙で包装し、薬売りがサービスに持ち歩いたサイコロ

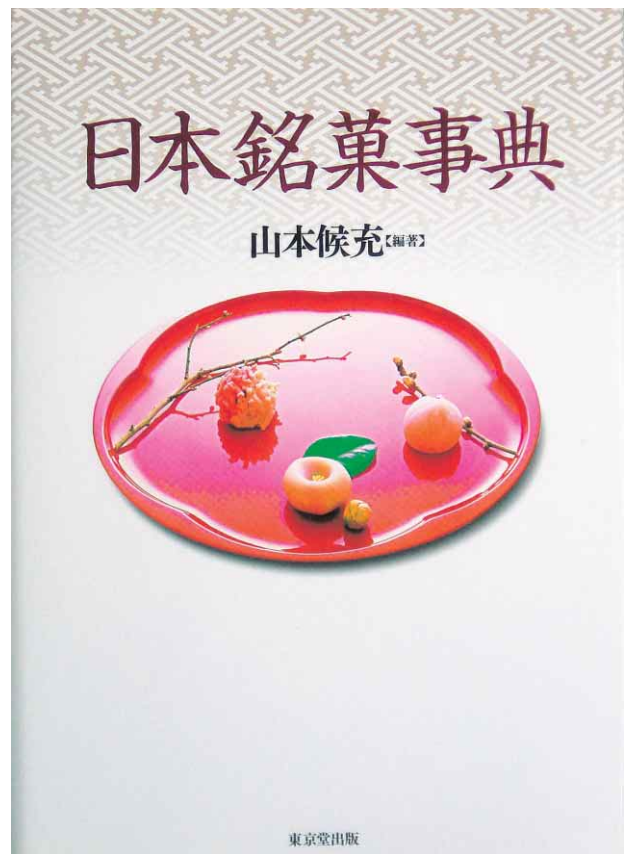
状の紙風船をおまけに付けているとされます。

佐賀県の「伊万里焼饅頭」は、陶器の伊万里焼きの風合いを表現した洋風焼き菓子で、ひびを入れる焼き上げで陶器の感じを表しているそうです。包装も陶器の模様を生かしているとのこと。

どうでしょう？菓子への知識と共に、その土地のイメージを身近に感じられないのでしょうか？

この本で少々残念なのは、徳島県の銘菓が12品しか記載されていないことです。理由はよくわかりませんが、これはちょっと少ないような気がします。けれども、菓子を通して、よその土地のことを知り、全国各地にいろいろな特色があることをあらためて知ることのできる楽しい本だと思います。

（民俗担当：庄武憲子）



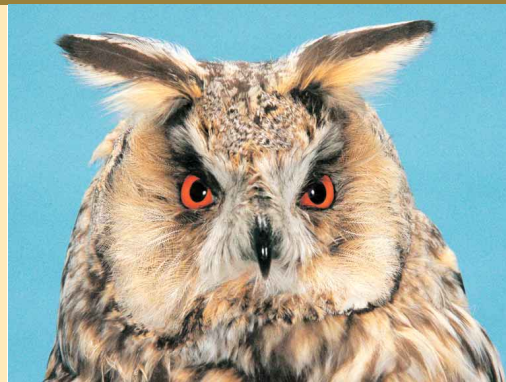
山本候充編『日本銘菓事典』
（東京堂出版 2004年8月刊 総283頁）

動物大集合

—動物標本の世界—

現在、地球上に生息する動物の種数は100万種とも200万種ともいわれています。地球上のあらゆる場所に進出しており、形や色・模様、生活の仕方などが変化に富んでいます。この企画展では、これまで当館が収集してきた昆虫、貝、エビ・カニ、魚、鳥獣などの標本を中心に動物の多彩な姿をご紹介します。

- 会期 2008年7月19日(土)～8月31日(日)
- 休館日 7月22日(火)・28日(月), 8月4日(月)・11日(月) 18日(月)・25日(月)
- 観覧料 一般200円, 大学生100円
※小学生・中学生・高校生は、夏休み期間中につき無料です。



トラフスク (徳島県)

学芸員による展示解説

(大学生と一般の方は観覧料が必要です。)

●日時

2008年

7月/20日(日)・27日(日)

8月/3日(日)・10日(日)

17日(日)・24日(日)

午後2時～午後2時20分

展示構成

(1) 動物とは？

- ①動物の分類
- ②動物の種数

(2) いろいろな動物

- ①魚類 ②両生類
- ③爬虫類 ④鳥類
- ⑤哺乳類 ⑥貝類
- ⑦エビ・カニ類 ⑧昆虫類

(3) その他

- ①標本にさわってみよう (タッチングコーナー)
- ②動物の絵を描こう (お絵かきコーナー)



ピラニア (南アメリカ)



ウシ骨格 (日本)



ガラガラヘビ骨格 (北アメリカ)



ツキノワグマ (石川県)



オウサマゴライアスツノコガネ (アフリカ)



メダマカマキリ (インドネシア)

『法隆寺壁画保存方法調査報告』

1897(明治30)年、古社寺保存法の制定により、法隆寺(奈良県斑鳩町)金堂壁画の保存方法の調査が始まりました。1913(大正2)年には、日本の古美術保存の大切さを提唱した岡倉天心らにより、文部大臣に対して壁画保存の緊急の必要性に関する建議が提出され、1916(大正5)年、壁画保存方法調査委員会が設置されるに至りました。委員会は1919(大正8)年まで9回におよび、建築、壁画の構造、材質、カビなどの生物被害、照明、地震などさまざまな角度からの詳細な調査・検討がなされ、壁画保存の方針の決定のほか、応急的保存方法、恒久的保存方法が検討され、恒久的保存方法の実験までも行われました。

それらの内容は、1920(大正9)年に『法隆寺壁画保存方法調査報告』として、B5判、本文145ページ、大型の折り込み図版を含む図版52枚、付録図版4枚の大部としてまとめられたのです。

1934(昭和9)年に法隆寺の昭和の大修理が始まり、建物の解体のために壁画のある壁体の取り外しについて検討が行われることになりました。1939(昭和14)年、壁画の剥落を止めるため、自然科学分野の研究者を交えた法隆寺壁画保存調査会がつくられ、剥落防止のために使う保存材料に関する議論が行われたといえます。

1942(昭和17)年からは壁画の模写が始まり、その後1945(昭和20)年の太平洋戦争終戦をはさんで壁画保存の作業は続けられました。

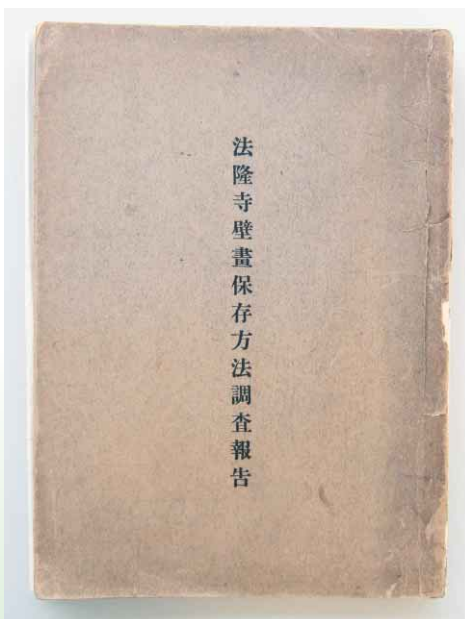
残念ながら金堂壁画の大半は、1949(昭和24)年1月26日未明、不慮の火災によって焼損してしまいました。これを契機に文化財保存の機運が高まり、1950(昭和25)年、文化財保護法が制定されました。法隆寺金堂が火災に遭った1月26日は文化財防火デーとして定められ、毎年、寺社や多くの文化財を保管する博物館施設では防火訓練等が行われています。焼損してしまった法隆寺金堂壁画は、われわれに文化財保存の大切さなど多くの教訓を残してくれました。

本書は、わが国における文化財の保存科学的調査研究の先駆けとして位置づけられ、現在の文化財保存の礎となったものです。その内容は、およそ90年も前に書かれたものとは思えないほどに多角的な視野から検証されたもので、現在でも十分に通用するものであると言えます。

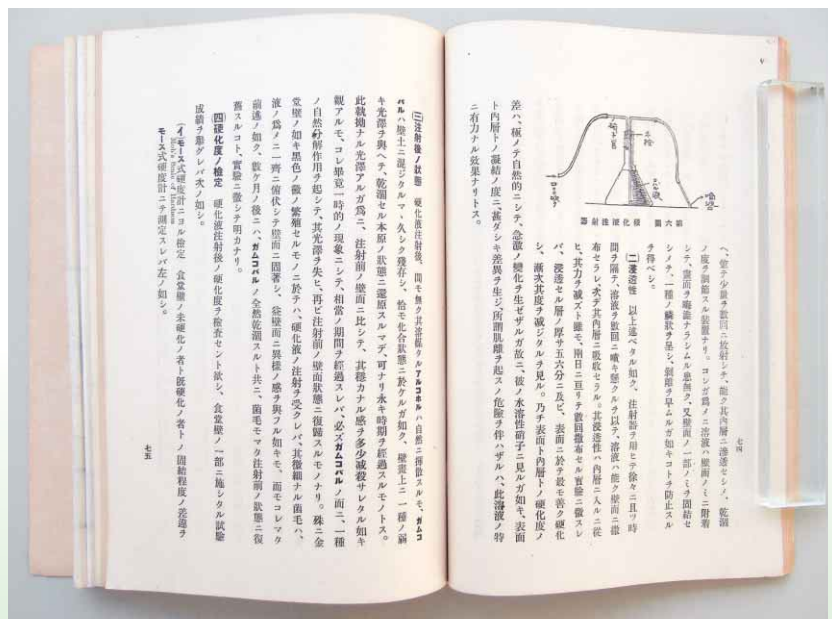
文化財保存の原点としても、文化財に携わるものにとっては忘れてはならないものだと思います。

本書は、すべての折り込み図版を縮小し、A5判で1939年(昭和14)に再版されています。

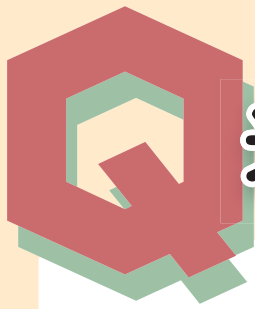
(保存科学担当：魚島純一)



法隆寺壁画保存方法調査報告の表紙



樹脂の含浸方法なども詳細に記述されている。



光るミミズがいるって本当?



2007年もそろそろ終わりを告げようとしている年の暮れに、新聞社の方から驚くべき情報が入ってきました。阿南市で光るミミズを発見したというのです。「本当にそんなミミズがいるのか?しかも12月だと言うのに!」と半信半疑で、まだ生きていたというそのミミズを貰いに車を走らせました。現場に着いてさっそく見てみると、何のことはないただのミミズでした(図1)。発見時の様子を詳しく聞くと、どうやら明け方に散歩している時に道の上で光っていたそうです。私自身ミミズに関する知識が乏しいので、博物館へ持ち帰り色々調べてみたところ、なかなか面白いことが分かってきました。

光るミミズの正体とは?

まず調べたのは、本当に光るミミズがいるのかということでした。結果、あっさりとその存在が明らかになりました。光るミミズというのは、分類学的にナガミミズ目ムカシフトミミズ科に属する「ホタルミミズ*Microscolex phosphoreus*」という種でした。まさにその名のとおりです。『新日本動物図鑑(上)』(北隆館)によると「体長3~5cm, 体幅1~1.5mm, 体節数74~76, 環帯を除いて半透明で少しピンク色を帯び、さらに剛毛が1体節に4対8本で背孔はない」などの特徴があるとされています。阿南市で見つかった個体も同じ特徴が見られました。世界中に広く分布し、日本では神奈川県で初めて発見されたのを皮切りに、各地から情報が多く寄せられているようです。実はそんなに珍しくないミミズだということが分かりました。

光るメカニズムは?

ホタルの発光には、ルシフェリンとルシフェラーゼという物質が作用しており、お腹の先端付近にある発光器により光を放つことができます。一方で、ホタルミミズも同じ物質をもっていますが、発光のメカニズムがホタルとは全く異なります。具体的に言えば、ホタルのように体内に発光器があるのではなく、体が刺激を受けたり傷つくことによって口や肛門などから発光物質が分泌される

というわけです。

謎に包まれたミミズ

ホタルミミズの文献を調べていると、その生態の多くは謎に包まれていることが分かりました。

1つ目は発見された時期です。阿南市での発見は12月下旬の真冬でした。生物の活動が衰えるこの時期に見つかったのは単なる偶然ではないようで、過去の多くの記録も12~2月の真冬に見ついているのです。なぜ真冬なのでしょう?一説には、ちょうどこの時期に体長が3cmほどになり、雨上がりなどに地表面に姿を現すことが多いため、目撃例もあるのではないかと考えられています。

2つ目はその分布域です。ホタルミミズは現在世界各地で確認されています。日本でも発見が相次いでいるわけですが、このミミズの原因が南米で、日本にもともといなかったことを考えると、日本での分布に疑問が出てきます。移動能力に乏しいミミズが分布を拡げる理由として、人の手によって土と一緒に運ばれることが第一に挙げられます。しかし、それだけでは説明が付きません。果たして日本のホタルミミズと外国のホタルミミズは同じ種なのでしょうか?

今回徳島県から初めて発見されたホタルミミズですが、まだまだ情報が少なく謎に包まれています。その謎が解き明かされれば、意外と身近な生き物だったりするかもしれません。

(無脊椎動物担当: 山田量崇)



図1 阿南市で発見されたホタルミミズ

7月から9月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	申込	対象(定員)	備考
歴史体験	勾玉をつくろう①	7月13日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(30)	
	勾玉をつくろう②	8月24日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(30)	
	土器づくり①(成形)	9月28日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(40)	②(10/26)とセット
歴史文化講座	海部地方の盆棚	7月27日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	海南文化館
	海陽町立博物館の収蔵民具から探る昔の暮らし	8月31日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	海南文化館
野外自然かんさつ	徳島市中心部の地質見学	7月20日(日)	13:00~16:30	要	小学校高学年以上(25)	現地集合
	セミの羽化かんさつ	7月26日(土)	19:00~21:00	要	小学生から一般(20)	
	漂着物を探そう!	7月27日(日)	9:00~17:30	要	小学生から一般(30)	貸切バス
	水生昆虫のかんさつ	8月2日(土)	10:00~12:00	要	小学生から一般(50)	
	川魚かんさつ	8月9日(土)	10:00~12:00	要	小学生から一般(40)	
	鳴く虫のかんさつ	9月6日(土)	19:00~21:00	要	小学生から一般(30)	
みどりの工作隊	葉っぱのスタンプと押し葉カルタをつくろう	7月27日(日)	13:00~16:00	要	小学生から一般(30)	
ミュージアムトーク	福井県の恐竜発掘調査	8月10日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	
	徳島の銅鐸	9月7日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	
室内実習	貝化石標本をつくろう	8月9日(土)	13:30~16:00	要	小学校高学年以上(20)	
	化石のレプリカをつくろう	8月10日(日)	10:00~11:30	要	小学生から一般(20)	
	標本の名前を調べる会	8月22日(金)	10:00~16:00	不要	小学生から一般	★参照
	ミクロの世界—電子顕微鏡で化石を見よう!①	8月31日(日)	10:00~12:00	要	小学校高学年以上(10)	午前の部
			13:30~15:30	要	小学校高学年以上(10)	午後の部
ミクロの世界—電子顕微鏡で植物を見よう!②	9月28日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(10)		
企画展関連行事	企画展「動物大集合」展示解説①	7月20日(日)	14:00~14:20	不要	小学生から一般	観覧料必要
	企画展「動物大集合」展示解説②	7月27日(日)	14:00~14:20	不要	小学生から一般	観覧料必要
	香りの植物を探そう②	8月3日(日)	13:00~16:00	要	小学生から一般(25)	現地集合
	企画展「動物大集合」展示解説③	8月3日(日)	14:00~14:20	不要	小学生から一般	観覧料必要
	企画展「動物大集合」展示解説④	8月10日(日)	14:00~14:20	不要	小学生から一般	観覧料必要
	企画展「動物大集合」展示解説⑤	8月17日(日)	14:00~14:20	不要	小学生から一般	観覧料必要
	企画展「動物大集合」展示解説⑥	8月24日(日)	14:00~14:20	不要	小学生から一般	観覧料必要
部門展示関連行事	部門展示「浜辺の植物」展示解説	8月3日(日)	13:30~14:00	不要	小学生から一般	観覧料必要
その他	夜の博物館ドキドキ体験ツアー	8月2日(土)	19:00~21:00	要	小学生から一般(30)	

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。

◎企画展の展示解説は企画展観覧料が、部門展示の展示解説は常設展観覧料がそれぞれ必要です(高校生以下は無料)。

★「標本の名前を調べる会」は、植物・動物・(昆虫・貝など)・岩石・化石などの標本の名前を調べる会です。

希望者は、採集標本(1人30点以内)を持って、直接博物館までおこしてください。定員はありません。

●お申し込みについて●

- ◎1枚の往復はがきには、1行事のみご記入ください。
- ◎行事日の1カ月前から10日前までに必着で右記までお申し込みください。
- ◎返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。
- ◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳しいことは当選された方にお知らせします。
- ◎原則として、参加費は無料です。

〈往信の表面〉	〈返信の裏面〉	〈返信の表面〉	〈往信の裏面〉
50 770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館 普及課	(何も書かない でください)	50 □□□-□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1. 参加希望の 行事名 2. 参加希望者 全員名(学年) 3. 住所 4. 電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館普及課へ(電話088-668-3636)

博物館でボランティアをしてみませんか？

博物館職員といっしょにイベントの企画、準備、実行をしていただけるスタッフ(ボランティア)の方を募集しています。

■活動内容：博物館の常設展示室において、平成21年2月11日(建国記念の日)に開催を予定しているイベントの企画、準備、広報などを行います。そのほか、年間を通じての博物館資料を楽しく知ることのできる体験キット

の開発などを行います。

■活動期間：毎月2回(第2・3日曜日の午後)に会合をもち、打ち合わせ、準備作業などを行います。

くわしくは博物館ボランティア担当まで

博物館ニュース No.71

■発行年月日 2008年6月25日
 ■編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
 TEL088-668-3636 FAX088-668-7197
<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp>